

遊び友達

木坂 広一

今の住まいを教えてくださいましたのは、隣のマンションに住んでいる村中安夫である。

「建物は古いけど、低家賃だから君に向いている」

彼は冗談っぽく言った。川野明夫はただちに飛びついて契約した。都内の東部に位置し、乗車駅まで徒歩十分くらいの距離である。S川沿いであって、七階の窓から眼下に清流が望める。入居したての頃、少し先に寒緋桜が兩岸の遊歩道に咲いていて、その辺では唯一の色彩だった。川野は風景も室内も気に入っている。住み出してからいざという時のためにお互いにスベアキーを預けた。二人とも慎重な性格だから滅多になくするようなことはなさそうだが。村中はどんな所か中を見に来た。

「悪くないね」彼はしきりに視線を這わせる。

「ああ、なかなかいいよ」川野も相槌を打つ。

「風呂場とトイレが一緒だね」

村中は風呂場の鴨居に手を着きながら言う。

「古い建物はこんなものだ」

それから村中がふと思ひ出したようにこんな話をした。

「面白い話を住民から聞いたな。以前に、その川に足を悪くした犬が飛び込み自殺をしたそうだ」

「犬でも自殺するのか」

「イギリスなんかでは、けっこうあるそうだ」

村中は意味もなくスチール製の鴨居をコンコン叩いた。彼らは大学の同級生で、川野が史学科なら村中は英文科だった。学生の頃、それほど付き合いがあつたわけではないが、卒業してしばらく経ってから、新宿の飲屋街で偶然に行き会った。どこかのバーに入り、飲み交わしているうちに親しくなった。仕事は川野がフリーライターなら村中は区役所に勤めている。

「仕事以外に何かやっているのかい」川野が聞いた。

「英語圏の外国人達と付き合っているよ。英会話に役に立つからな」と村中。

「君はあの頃から、英語が得意だったな」

「向こうの連中と話すのは楽しいよ」

「美人はいるかね」川野は好奇心をほのめかす。

「ああ、いないことはない」

「一人くらいものにしたか」

「俺、そういうことには関心ないね」村中はちよつとイヤな表情をした。

「俺は金髪女と遊んでみたいね。紹介してよ」

「どうかかな」

「できたら、アメリカ人女性を希望するよ」

「川野君は恋人いないのかね」

「いることはいる。しかしもうすぐ別れるよ。あんたは」

「いない」村中は素っ気ない。

「そうか」と川野。

「俺、三十歳までに結婚するつもりだけだな」

村中は一つ年上の二十八で、背が人並みに高く、目鼻立ちを整っているが、女を引きつける魅力は感じられない。どことなく鬱屈していて、話し方も淀みが多い。しかし実直な性格だから区役所の仕事は向いていそう。一時間半ほど飲んで別れたが、「また飲もうよ」と言い合った。何度も飲んでいるうちに村中は案外女が好きだということが分った。男が女を好きなのは当たり前前のことだが、付き合い方は正反対であった。川

野は女色を好み、村中は清纯派だった。やがて川野は同棲している女と別れたが、話す必要もないから黙っていた。打ち明けたら村中は旧時代の価値観の持主だから「女を捨てた」と誤解しかねない。そんなことはなく、話し合いをして納得すくめである。アパートや大方の家具は譲り渡し、何ら疾しいやまことはない。

再会した二人は早々と地をさらけ出すようになった。村中の方が自分を語り、川野は聞き役だった。もつとも川野は自分の個人的なことを話すのが好きではない。「俺はこれでも面食いでね、結婚する女は美人に限るな」

村中は彼の理想の女はYという女優だとかで、彼女こそ最高だと褒め讃えるのだが、それが一昔前の古風な女で、今時テレビにも出ていない。ホステスにYに似た女がいて、三十代の半ばで男の子が一人いる。大工の棟梁の愛人がいると聞いているが、嘘か本当かはつきりしない。相手がオーケーするなら結婚してもいいと言う。そうかと思うと、同じ店のすれからしホステスにも関心をもっている、顔がいいからと交際したがっている。二、三万円をはずめばベッドを共にしそうな女で、教養や品性などかけらもなく、彼はただ容姿だけにこだわっている。性犯罪者が刑事に

相手の女のことを聞かれて、「綺麗だから」としか答えない単純な頭の持主がいるが、あれと同じだ。村中には何か欠けている。いつだったか彼は、

「自分は精神的に駄目になった」

漏らしたことがある。

「どう駄目なの」

「何て言うのかな。自分の中から男らしい力とか、勢いが湧いてこなくてね」

「性欲がないってことか」

「一概にそうとは言えないけどね」

「でも、異性に性的な興味はなさそうだね」

「今から決めつけないでほしいね」

村中は何かにつけて、自身のことを語った。彼は千葉県葉島の銚子市に生まれて、両親を幼少時に亡くし、親類に育てられたから親の愛情を知らない。特に母に甘えた覚えはない。実の親がいなかったのは成育上致命的と言っている。だからか女の内面に関心がなくて外面のみにこだわるのだろう。いささか病的な感じがした。それで、「あんたはデパートのマネキン人形を見て、可愛いから結婚をしちやおうと言いかねないね」とかからかったことがある。村中は笑いながら否定した。そんなジョークでも、どこことなく心当たりがあるように

見えてしまう。

川野は原稿をパソコンで打って出版社に送る日々をくり返していた。

夏の盛りで毎日猛暑日が続いている。土曜日の午後、村中の部屋に池袋のホステス二人を招く約束をしていた。一時頃に行くと、女達はリビングのテーブルに座って待っていた。

「あ、どうも。楽しみにしていたよ」

川野は軽く頭を下げた。女優のYに似た女と誰とも寝そうな女である。誰とでも：の方は村中によるとちよつと可愛い風貌というが、川野はそんな風に思ったことはなく、ただ寝るだけなら差し支えない。最初にビールで乾杯して飲みだした。ピーナツや裂きイカをつまみながら四人とも五百ミリの缶入りを煽った。ほどほどに酔ってからダンスを踊った。ダンスと言ってもチークしか踊れない。それから二組に別れて、川野は誰とでも：と組み、村中は思し召しの女優に似た女とカップルになった。川野は早々と体に触れて刺激を与え、女をその気にさせたが、村中は壁にもたれて手を握り合っていて、手相を見ているような仕種をしているだけだった。川野は抱き合つたまま、

「おい、何をしているんだ。早くしなよ」^せ急かした。

「我々はこれで楽しいよ」

「勝手にしろ」

川野が相手の衣服をはだけて、怪しげな振る舞いに及んだら村中がいつの間にか近づいてきて、両足を自分の体に挟んで、プロレスの格好で引きずっていった。川野は立ち上がり、何をするかと怒声を浴びせた。

「肝心な時に妨害する奴があるか」

「冗談だよ。愛嬌だと思つてよ」

「ふざけるな。君は遊びを心得ていないのか」

「多少は知っている。でも行き過ぎたら、謝るよ」

「君はインポだろう」

川野はつい言っていけないことを口にした。

「違う。インポじゃない。そんな風に決めつけることはないだろう」

言い過ぎたかもしれないと川野は気が引けた。

「今言ったことは、訂正してもいいよ」

「ああ、そう願いたい」

「言つていいことと悪いことがあるからな」川野は感情的になりがちな自分を諷めた。

仲直りをしたものの、そんな言い合いをしたからか、間もなく女達は帰ってしまった。

彼女達がいなくなると、川野は外の空気を吸うため

に窓を開けた。遠くに積乱雲が湧き上がっていて風も湿っていたから、ひよつとして天気が崩れるかもしれない。やがて村中の方を見て話題を変えて穏やかに話した。

「大工の棟梁の愛人つて、それほどでもないよ」

「いや美人だ。あんな綺麗な女性と知り合いなんて、自慢だね」

「俺には分からんなあ」

女優に似ていると言つても村中が言うほど美貌ではなく、整っているものの、魅力も輝きもなく、街中で見ても目立つような女ではない。ただ村中の美意識が劣っているに過ぎないのだ。

「村中君は何でも誇示したがるな」

「俺の性格かもな」

それに、いくつかの点で俺と比較して、自分の方がウテだと思つているのが気に入らないね」

「気がつかなかったな」

「俺、そういうのつて、大嫌いだ」

「そうムキになるな」

「直した方がいいよ」

村中は急に思い出したように、

「そうだ。この間、外国人女性を紹介しろと言つただ

ろう」

「ああ、言ったね」

「メドが立ったんだ」

「そうか。じゃあ、合わせてよ」

「ただ君の英会話に問題があるな」

「そんなこと関係ない」

「もし通じなかつたら、俺が通訳してもいいけどな」

「しかなかったら、してもいいさ」

川野は妥協してこの際村中の顔を立ててやった。見せびらかしたいならそうすればいい。前にも外国人女性のことを自慢げに話し、英語のできない川野を馬鹿にしたことがあった。しかし日本人の女と話すだけで上がってしまうのに、どうして外国の女性とコミュニケーションが取れるのだろうか。それに本を読むタイプではないからインテリらしい思考能力もない。英語だと人が変わってしまうとでもいうのか。

その日、四人は銀座七丁目にあるビアホール・ライオンで飲むことにした。店の中に入ると、とたんに棕鳥の大群のような騒音が押し寄せて来て、真夏の客達は談笑しながら酔いしれていた。三十二歳のジェーンは大柄で太っており、いくらか暗闇を抱えているように見えた。上智大学で日本文学を専攻していて日本語

が達者だった。髪はブロンド、背は一メートル七十二センチある。臍脂へんじのコットンシャツに花柄模様のスカート姿で、以前に通っていた眼科の女医さんに似ている。第一印象がよくて特に笑顔がいい。

「ユアースマイル イズ チャーミング」

「オー サンキュウ」

「ドウユウー ハブ ボーイフレンド？」

たどたどしいからか、ジェーンは日本語で答えた。

「バーモントにいるヨ」

「あなたは素敵だから、恋人がいてもおかしくないね」

「どうも、ありがとう」

一見してプロレスラーのようで、特に太めの大腿部は官能的だった。店内はぎっしり客がつまっており、狭苦しくて、ジェーンの前髪が膝に当たった。その度に彼女は、

「ゴメンナサイ」

謝ったりした。そしてニッコリし、笑顔は性的なニユンアスすら感じさせた。反対の方のテーブルには村中とメアリーが会話を交わしているのだが、何も聞こえない。村中のことだから、四角四面のやり取りをしているに違いない。彼のそばにいたら得意気に喋り、どうだいと誇示しかねない。それでいてメアリーを口

説こうという蛮勇はこれっぽっちもない。何しろ据え膳も食わない男だ。川野は外人女性とは未経験だから、いいチャンスだと虎視眈々である。日本の男は金髪女性に憧れていると言うが、彼も人一倍執心している。ジェーンは髪の色こそ異なるが、この際、何色だっていいから何とかしてベッドインしたい。背後で客とウエイターが通り、その瞬間、

「オー、危ない」

「ジェーンの体が傾いて、プロンドが彼の頬に触れ、何とも言えないいい香りがした。

「ソーリー、あなたに当たってばかりいて」

「いえいえ、僕に何度ぶつかってもかまいません」

それどころか、プロレスの技で組み敷かれて、いいようにされてみたい。あちこちでジョッキの触れ合う音が聞こえてくる。ジェーンと川野も酔いが回ってきたのか、いつの間にか大腿部が触れたまになっている。

「ミスター川野、アメリカ好きですか」

「大好きです」

「どういうところが？」

「ジェーンのような女性がいるからです」

「ワタシ、そんなにいいですか」

「僕が出会った外国人女性の中でナンバーワンです。」

あなたは優しくして、包容力があります。母のような人です」

「あなたのお母さんに似ていますか」

「そっくりです」

「あなたの理想の女性はお母さんのような人ですか」

「そうかもしれません」

「きつと、ステキな女性でしょうね」

「母は美人です」本当は不美人で粗野でデリカシーがない女だが嘘をついた。「ジェーンのような綺麗な目をしていきます」

「嬉しいわ」

「あなたは人から愛されるタイプです」

「本当のことを言うと、私、男の人、愛したことない」

二人は手を握り合っていた。

「今までよく辛抱したね」

「とても辛かった」

「僕がジェーンに素晴らしい体験をさせてあげたい」

「日本の男性、段々好きになってきた」

「それなら、最高にハッピーだね」

それから川野は思い切って自分の気持ちを打ち明けた。

「近日中に、セクシーなジェーンを抱いてみたい」

「おう！そんなこと言われたら、とろけそうよ」

これ以上いい酔い方はなかった。時間が来て、店を出ると女達は村中に教えられ、松坂屋跡の銀座シックスを見てから帰るらしく、途中で別れた。川野は後日ジェーンを抱けるかと思うと、今から舞い上がりそうだった。

村中は帰りながら、

「うまく行つたみたいだな」皮肉な笑みを浮かべた。

「気が合つたからな。次は二人だけで会うよ、ジェーンのフトモモと笑顔に参つたな」川野は自信に満ちていた。

「君はやることしか考えないのか」

「彼女もしたがっていたからな」

「我々は清潔な話をしたよ」

「しかし、アメリカ人女性はそんな会話に興味ないぜ。本音は、もつとドライに迫つて来てほしいんだよ。キミは勇気がない」

もつとも、そんな風に話しても村中は受け入れないだろう。相変わらずの石頭のカタブツである。そのくせ嫉妬深くて、今までも川野の恋路をしばしば邪魔した。今度はそうはさせないぞ……

三日目の午後、高円寺駅で待ち合わせをした。この

街が好きで度々やつてくる。駅の出入り口はいつきても賑わっているから感心させられる。ジェーンはまだ足を踏み入れたことがないと言うから、名の知れたところを案内した。村上春樹の小説に出て来る中央公園や、中原中也が一時期同棲していたハル商店街にも。

だがどこだかわからなかったから、東商店街にあるナジャというジャズ喫茶にも立ち寄つて、ペペロンチーノを食べてからアイスコーヒーを飲みながら雑談した。「アキオ、最近、何か楽しいことあつた？」ジェーンが聞いた。

「楽しくないことがあつた」

「それ、ナアニ」

「つまらないことだけだ」

少し前に神保町の喫茶店で怒つたことがある。タンゴ喫茶の姉妹店に入つてみたら、いくら待っていても飲物を運んでこない。小刻みに震えるバンドネオンを聞きながら苛々してきた。オーダーをしたウェイトレスはレジの近くに立っている。ロングスカートの陰気くさい中年女で、手を上げて呼んだ。

「どうしたの。コーヒーを持ってこないのか」

女の目つきが変わつた。

「申し訳ありません。只今、お持ちします」

「忘れたのか」

「相すみません」

「客を無視しないでくれよ」

「そうではありません。忘れたのです」

「無意識の無視だ」

川野は飲食店で軽んじられと異常なくらいに腹を立てる方で、その時も許せなかった。女がコーヒーを運んできたにもかかわらず、川野は黙って店を出てしまったから、女は面目を失っただろう。

「お灸をすえてやったのです」

「オキユウ？」

分らないままに川野は続けた。「僕は無視されるのが

いやなんだ」

「誰でも同じね」

「僕は特別だ」

「父もそうだった」

「人間はどんな時でも尊重されたいよ」

「でも、過剰反応はダメ」

川野は話題を変えた。

「ジェーンは学者を目指しているそうだね」

「将来は日本文学の著書を出したいの」

「ご両親は期待しているでしょう」

父親はプロレタリアからのし上がった人らしく、苦勞して惨めな思いをしたから、娘のステップアップを願ってやまない。ジェーンも子供の頃、父や母の姿を見ているから絶対に学者になって払拭したいと言う。話をすればほど好感の持てる女性だった。川野はますます好きになった。そしてついマジな顔つきになった。ジェーンはそんな川野を見て、

「リラックス、リラックス！」

解きほぐしてくれた。川野はジェーンが話している間自分の育ちのことを考えていた。福井県の彼の実家は不動産業で、両親とも凡庸だった。特に母は子供の教育もしつけもできなかった。

「ご両親は立派な方ですね」川野はお世辞でなく言った。

三十分ほどいて、店を出るとジェーンの手を握りながら今日は思い出の日にしたいと伝えた。私もそうしたいといい笑顔になった。空は晴れていたが湿度は高く、ムンムンしていて汗が滲み出た。

「冷房の効いた部屋で休もうよ」

「イエス。私も涼みたい」

五分ほど歩いて南口のホテルに誘った。二階の部屋に案内されて、ベッドの縁に座り、体を休めて顔を見

合わせたらジェーンは悪戯っぽく体をゆすった。

「心地いいわ」

ジェーンを抱いたら、口を開いて舌を突き出したから川野も同じような仕種をした。長いキスをしながら大腿部に触れた。

「君のフトモモ、素晴らしいよ」

「太り過ぎない」

「僕は太ければ太いほど好きです」

衣服を脱がすとさらに際立っていて、女王様のような威厳があった。三十分ほど戦闘が続いた。日米の闘いは熱戦になり、二人とも汗まみれになった。川野は終わった後、惜しみなく絶賛した。

「ジェーンは美人で肉感的で、小沼のようにしっとりしていて、しかも締まりがいいね」

「オー。褒めて頂いて、こんな嬉しいことないです」

「あなたは女神です」

「オー、サンキュウ、サンキュウ」

川野は初めて外国人を抱いて、醜態を演じることもなく、うまく行ったからこんな気分のいいことはなかった。

夕方近く、高円寺のプラットホームで別れの挨拶をした。ネツカチーフと心ばかりの餞別を贈るとジェー

ンは感謝の言葉を述べた。

「今日は記念すべき日になった」

二人とも一回だけの逢瀬と心得ていて、これ以上深入りしないというのが暗黙の了解事項となっていた。

「君との経験、ぼくの自信につながるね」

「日本男子、がんばったよ」

「ありがとう」

間もなく三鷹方面行きの電車がホームに滑りこんできました。ジェーンは愛嬌を浮かべ、手を振りながら車内に入っていく。川野は電車が見えなくなるまでホームに立っていた。

その夜、村中が電話をかけて寄越し、ジェーンのことを聞かれた。何があったか興味しんしんだろう。

「よかった。ジェーンは素晴らしいよ」

「体がいいだけだろう」

「体もいいけど、心もいいよ。」

「でも、ブスだよ」

「いや、ブスじゃない、美人だよ」

「どうして、あれで美人だよ」

「美人だから美人だよ。キミには女の魅力が分らないな」

「寝てくれたから、そう言うのだろう」

「抱いて女の素晴らしさが分ればいいじゃないか」

「女は觀賞に値しなければ認めないね」

「俺と寝てくれた女はすべからく小野小町だと思ってる」

「アメリカ女は対等に扱ってくれたかね」

「日本はアメリカに戦争に敗れたけど、今は対等だ」

「そうか、それが気になっていた」

「それに日本の歌麿は白人には強いよ」

「その点は俺、自信ないな」

三十歳まで結婚すると誓っていた村中が友人の紹介で知り合った女性と短い交際期間を経て式を挙げた。ところが、不幸なことに破綻し、しかも二ヶ月で新妻に逃げられた。彼の勤める区役所の街づくり推進課では評判になり、面目を失った。

「俺は恥をかいたよ」

「仕方がないよ」川野は慰めようがなかった。

彼は立ち治るために鉄亜鈴やエキスパンダーを買って来て体を鍛えだした。それが高じてボディビルのジムにも通うようになった。やや猫背気味の体型も矯正し、胸板も厚くなった。

「男だつて、見てくれが大事だからな」

村中は自慢した。もともと自己愛が強く、体も自慢のタネになった。さらに一段階登つてジョギングに熱を入れ出し、週に何日か々々木体育館も通った。病膏盲に入るような熱中の仕方である。そして、

「女は股を広げられてもお断りだ」口癖のように言つた。

終生の友人かのような二人だが、あまり付き合わなくなった。特に川野は村中をマラソン男と命名して敬遠した。もともと変わり者の偏屈な性格はますます目についた。何かに書いてあったが、インポという肉体の欠損は精神にも相互作用してイビツになっていくというのだ。村中を見ているとそう思わせるものがあった。

三年の年月が経ち、二人とも三十代の半ばに近付いた。村中は酒を飲むことはあつても女は一切遠ざけた。というよりも必要としなかった。川野は仕事の原稿を書くかたわら適当に遊んだ。彼らの関係は疎遠になりつつあったが、そうかといつて絶縁したわけでもない。

遊歩道の寒緋桜が咲き出した頃、村中がひよっこり訪ねて来た。お茶を出すすと神妙な顔つきをして、なかなか要件をきり出そうとしない。川野は自分から聞こ

うとはせず黙っていたら向こうからやっと話し出した。

「俺、再婚するかもしれない」

「何だ、そういう話だったのか」

「ランナー仲間の一人が紹介してくれてね。それがス

テキな女性でさ、俺は一目惚れした」

「意外な展開だ。豹変したんだな」

「唐突かもしれないけど」

「何だか、よさそうな話だ」

「うん、俺もそう思う」村中は緊張したようにニコリ

ともしない。「俺がオーケーすれば決まりだね」

「そうか、よかったな」

「彼女も喜んでるよ」

話を聞くと、相手もバツイチでその点は共通していた。前の夫はギャンブル狂らしく、お蔭で月々のガス代や電気代の支払いにも事欠いた。依存症は直る見込みもなく、結局協議離婚して、一人になると叔父の経営する法律事務所勤めるようになった。

「あんな綺麗な女性と出会えるなんて、思ってもみなかった」

「あなたは依然として、綺麗がキーワードだね」

「そうでなきゃ結婚しないよ。先方は生活の安定が第

一だと言っているがね」

公務員の村中は倒産や解雇の心配はなく、金銭に関しては石橋を叩いて渡る方だから相手の希望にかなっている。

「村中君は理想的というわけだね」

「まあ、そうだね」

「お互いに文句ないんだな」

村中は冷静沈着だった。前回の二の舞は踏まないぞという思いがあるのかもしれない。しかし……と川野は疑問を持たざるを得なかった。言うまでもなく性的不能のことである。川野に答えが出せることではなく、黙って傍観しているしかない。

その十日後、婚約者を紹介したいから家に来てくれないかと連絡があり、お祝いを持って出かけた。廊下には未開封の花嫁道具がずらりと並んでいた。川野の知らない間にとんとん拍子に進んでいるようだった。妻になる女性は夏美なつみさんと言って、テーブルの一角に行儀よく座っていた。一目見てハツとした。品のいい顔立ちをしていて、村中の言う通り美形で賢そうな女性に見えた。もし自分が相手だったら初対面の印象で結婚を決めてしまうだろう。派手でないのも気に入った。夫に尽くしてくれて、しかも内面に秘めた魅力を感じさせた。

「村中がお世話になってます」夏美が丁寧挨拶をした。

「いいえ、こちらこそ」

「突然、お呼び立てして、申し訳ありません」

夏美の表情に人間味のある笑みが浮かんでいた。その笑顔には村中の友人への無意識的な信愛の情を感じさせた。

「何でも話せそうで心強いです」と夏美。

「もし何かあったら声をかけて下さい」と川野も如才がない。

「その節はよろしくお願いします」

「夏美さん、こんな男、頼りにならないよ」村中は引きつったような笑い声を立てた。

「そんな言い方、失礼よ」

「いや、こいつには、何を言っても大丈夫だよ」

「でも、お友達がいい方でよかったですわ」

「まあ見かけはね。猫被っているかもしれないけどね」

「そんなことないわよ」

「川野も早く結婚しろよ」

「相手がいればね」

「モテそうだから、その気になればすぐでしょう」

「いや、たいしてモテないよ」

「本当です」川野も合わせた。

「ほらな、自分で認めているよ」

「村中君にかかっちゃ叶わないや」

川野は笑いに紛らわしたが、村中の言い方には悪意がこもっていた。彼は妻になる女が川野に好意的にものを言うのが面白くないに違いない。もともと嫉妬心の強い方だった。

適当な時間になり川野はいとまを告げた。村中は家の玄関までついてきて終始無理した笑みを浮かべていた。毒舌っぽいことを言ったから気にしているのかもしれない。川野は軽くからかった。

「奥さんは新鮮でいいね」

「しかし、あっちの方は死火山だから、勘弁してもらうしかない」

「死火山だって。新婚早々からかい」

「まあそうだね」

「それでいいのか」

「仕方がないよ」

夫婦生活がないなんて信じられなかった。結婚する前に双方で確認し合うべきだろう、それをまだしていないのである。何と空々しい恋人同士だろう。これでは詐欺同然である。川野は何を言っているのか分ら

かったが、

「君はエゴイストだ」非難した。

「俺は金銭的にはしつかりしている」

「それだけじゃ駄目だ」

「いいんだよ」

「一緒になるなんて、考えられないな」

「ここまで来たら、後戻りはできない」

「むごいことをするな」

「自分はそうは思っていない」

「鈍感だ」

恋人たちは静々と物事を進めていた。間もなく身内同士でホテルの一室を借りて食事会をし、新婚旅行は後日に回した。その日が初夜というのに何もなかった訳である。抱かれることを期待していた新妻はどんな思いだったのだろう。川野は他人事ながら怒りさえ覚えた。村中はそんな夫婦をただ訝しげに見ているだけだった。

村中はマラソンに嵌っていて、ひたすら走ることで快感で、性生活などは無視して、花嫁の気持ちなど踏みにじっていた。芯からの自己中である。

年が明けて正月の雰囲気もなくなり、すぐに二月がきて、寒い日々が続いている。会社の帰り、同僚と昼

飯を食べに行つた。

「君は恋人いるかね」同僚が尋ねた。別に意味はなくてただ聞いただけだろう。

「心に思っている女はいるよ」

「思っているだけじゃ、つまらないよ」

「友人の細君だから、どうしようもないね」

「そんな女性を好きになって、どうするつもりだ」

「どうもしないよ。成り行きでそうなっただけで」

村中は相変わらず走ることに夢中になっていて、地方の大会に出かけているようだった。いつだったか、近所で顔を合わせた時、彼はふと口にしたことがある。「夏美は俺が走っていることを嫌がっているよ」

「走るのを非難しているのではなく、夫婦生活のことだろう」

「そうなのかな」

「俺が女だったら、イライラするな」

「そう言われてもなあ」

独身の頃、医師に相談したけれども、何の解決策もなかった。そんなものかと川野は気の毒に思った。話を聞くとあの時、手も舌も使わないそうだ。

数カ月が過ぎ、恐らく村中は走り続け、夏美は堪えていて複雑な気持ちでいるだろう。いつそのこと、村

中に話して自分が夏美を貰い受けようかとあらぬことを考えたが、そんなことは出来るはずはない。しかし川野は空想をするようになっていた。隣の人妻と抱擁したりキスしたり：

ある土曜日の午前中、村中が出かける姿を見かけた。話しかけたら都内のスポーツ洋品店に買物に行くと言う。少し時間が経つてから、何気なさそうに村中の家に電話をした。夏美が快活な声で対応した。

「出かけました」

「そうですか。用はないからいいけど、その後、お変わりないの」

「ええ、無事に過ごしているわ」

「それはよかった」

「でも：村中は走るだけで仕様がなない人よ」

川野は上辺だけの話をして始まらないから、彼が出かけたのを承知の上で電話したと打ち明けた。

「構いません。私は川野さんとお話でしたかったわ。

誰よりも村中のことをご存じの人だから」

「村中のことは、よく知っています」

「そうでしょう」

急に打ち解けたような雰囲気になり、何でも話せそうになった。川野は彼女への自分の気持ちさをさり気な

く打ち明けた。それを前提にした方がいいと思った。夏美は静かに耳を傾けていて、「私も同じです」と言った。川野は突き上げて来るものがあって胸が躍った。

「ああ、よかった。脱出口が見つかったみたいで」

「僕も話がしやすくなった」

心の奥の奥にあるものがこんなに早く表に出て来るとは予想もしなかった。ただの空想が現実になりそうだった。それには川野が村中に直接会って話し、承諾を得るしかないのだ：

「早く村中と二人だけで会って、ことを進めたいね」

「今すぐには無理です。彼は直情径行的なところがあ

るし」

「思いつめるタイプだよ」

「そうよ」夏美は冷静だった。

「自然に氷解するように持って行くわ」

「人生は諦めが肝心だとね」

「村中も内心ではそう思っているかもね」

「そうだろうね」

もしかしたら、別れるしかないと考えていたりしないか。いくらなんでも何も無い夫婦なんてあり得ないのだから。彼は自分の実体を知らないはずはない：

「川野さんは、ああいう男性を友人として好きですか」

夏美が改めて尋ねた。

「最初は好意的だったけど、段々と嫌いになったね」

「どういうところが？」

「村中君は自己愛の強いナルシストで、気持ちの悪い男だね。時にはぞつとすることもあります」

村中は何事も古風な考えの持主だから、現代人として前に進めず、それで内向化して自己愛の方向に行ってしまうのだろうか。

「まあ、そんなに？」

夏美は呆れたような声を立てた。その電話以来、秘密のお付き合いをするようになり、いつの間にか深い間柄になった。夏美は体の関係がこれほど女に幸福をもたらすのかと再認識したようだった。そして心はもう二度と村中の元には戻りたくないと繰り返し口にした。むろん結婚を考えているの言うまでもない。しかし懸念がない訳ではない。

「彼は何か臭わせた？」川野は聞いた。

「私たちのことでは、何も言わないわ」

「それなら安心だね」

「それはないけど、最近やたらと自分の体の欠点を悔しがっているの、絶望したみたいに」

「気の毒だけど、解決不能だね」

「そうでしょう、だから村中とは別れるしかないわ。」

こんな不自然な生活はイヤ」

「君の考えは正しい、早く話すよ」

「案外うまくいくと思うの」

その三日後、朝早くS川の遊歩道を眺めていたら、ピンポンとチャイムが鳴った。村中の声がしたから玄関に出ると、バッグを手にして立っていた。

「これから、大会に行くけど、泊りがけだから、妻をよろしく」

「了解。気を付けて行ってきな」

「有難う。後はよろしく」村中は必要以上にニッと笑った。走ることが楽しいのか、それが顔に現れているのだろう。最近では断って行くようなことはなくなつたが、その日は機嫌がよかつたのかもしれない。

今の村中なら話せば分るかもしれない。彼はあれでも理性的な性格だ、よし思い切って話し合いに持って行こう。いつがいいか近日中に越したことはない。そんなことを思いながら、川野は浮き足立っていた。

仕事の打ち合わせをして夕方帰宅した。トイレに入ろうとしてドアを開けると、ギョツとした。鴨居に死体がぶら下がっていたのだ。全身にゾツとするような悪寒が走った。首に縄をかけた村中である。首が異様

に長く延びて薄く笑っている。バッグと封筒に入った鍵が足許に置かれている。急に冷たいものがよぎって凍てついてしまった。村中にしてやられた気持ちだった。

「復讐をしゃがったな」川野は呟いた。「彼は我々の関係を知っているのだ」

夏美にも伝えなくては…その前に119番に電話をした。二人の未来はもうないだろう。幸福な気分はあつという間に消滅してしまった。